

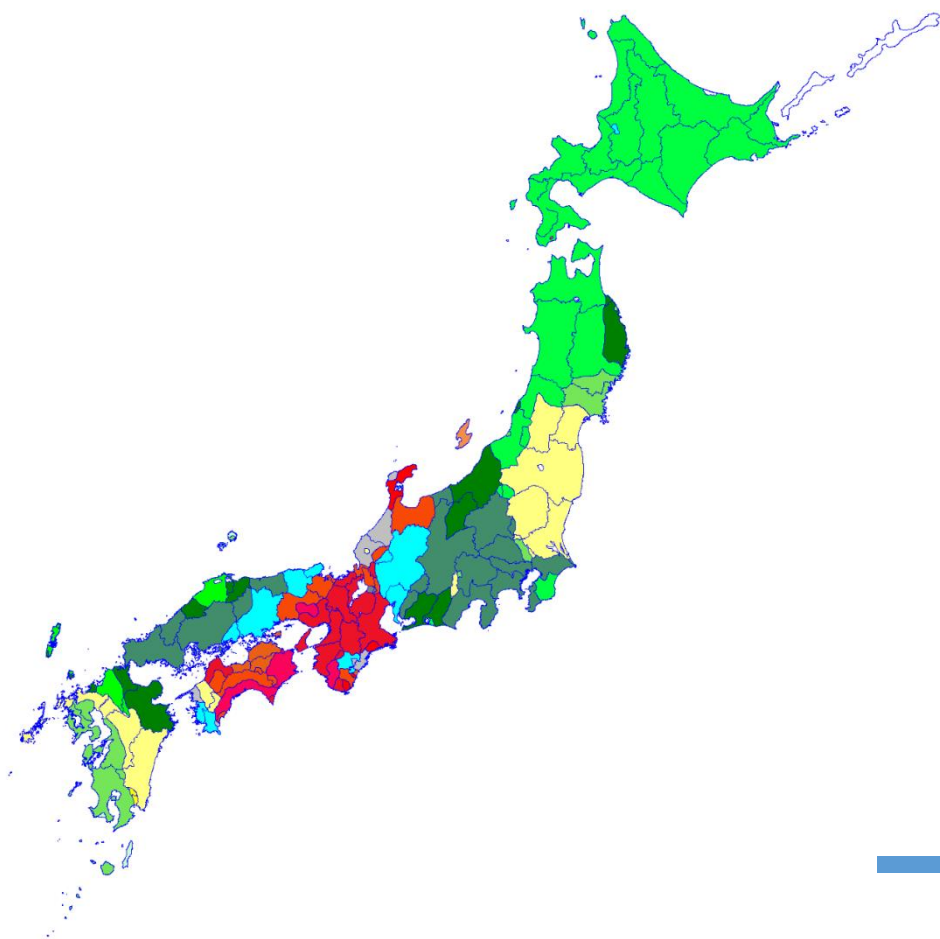
日琉諸語の韻律体系における culminativity と obligatoriness

五十嵐陽介
国立国語研究所

1. はじめに

はじめに

- 日琉諸語の地域変種の語レベルの韻律体系(“アクセント体系”)は極めて多様
- 日琉諸語地域変種の韻律研究からの知見は言語研究一般の発展に資するはず



金田一春彦氏作図による(『新明解日本語アクセント辞典』2001年, 三省堂に基づいて作成)

はじめに

- 日琉諸語地域変種の韻律研究は国外にはほとんど知られていない
 - 東京方言を対象とした韻律研究からの知見は広く共有されているが、それ以外の地域変種が日本語研究者以外の議論の俎上にあがることはほとんどない

- なぜか？
 - 理由1: 論文が日本語で書かれているから
 - 理由2: 日本語学に特有の枠組みが用いられているから

→単に日本語を英語に訳しても海外の研究者には理解されがたい。

はじめに

- (五十嵐調べで)最も頻繁に引用されている日琉諸語地域変種韻律研究:

Haraguchi, Shosuke 1977. *The Tone Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology*. Tokyo: Kaitakusha.

英語で書かれている

一般に広く知られている枠組み(自律分節音韻論)を用いている

引用件数 (Google Scholar)	全期間	489件	(日系研究者による引用42件, 39%)
	2013-2023	109件	

目的

- 広く受け入れられているHyman (2006)によるobligatorinessとculminativityに基づいた語レベルの韻律体系の類型論 (word-prosodic typology) を日琉語諸方言に適用する。

Hyman, Larry M. (2006) Word-prosodic typology. *Phonology* 23(2), 225-257.

- その際に生じる種々の問題をコメンテーター・オーディエンスと一緒に議論する。

2. Obligatoriness, Culminativity

Hyman (2006)

- **OBLIGATORINESS:** every lexical word has at least one syllable marked for the highest degree of metrical prominence
 - 「少なくとも1つのプロミネンス」(0はダメ)
- **CULMINATIVITY:** every lexical word has at most one syllable marked for the highest degree of metrical prominence.
 - 「多くとも1つのプロミネンス」(2つ以上はだめ)
- 両方を満たす言語が「ストレス言語」

類型化の指針(Hyman 2006)

■【指針1】

Word domainの特性のみを対象とする。Phrase-levelの特性は除外。

“this study is limited to prosodic properties which hold within the word domain vs. properties which make reference to the phrase or utterance levels” (Hyman 2006: 227).

※本発表では「文節あるいは文節より小さい単位に与えられるトーン」とする

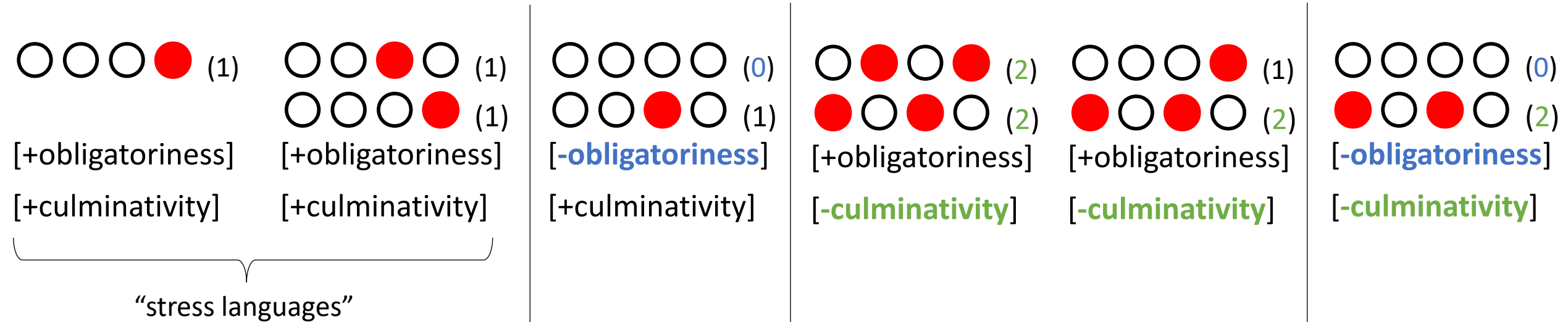
類型化の指針(Hyman 2006)

■【指針2】

基底形に存在して特性か、規則によって与えられる特性かを問わない。

“this study is primarily concerned with properties which are present at the lexical level, whether from URs or introduced by rule” (Hyman 2006: 227)

4つの類型



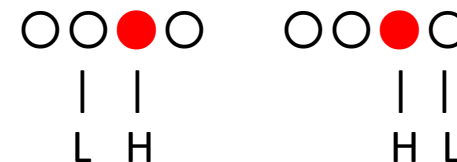
● プロミネンスのあるTBU

類型化の指針

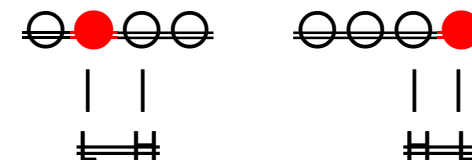
■【指針3】

プロミネンスがあると分析できる条件(日琉諸語の場合)

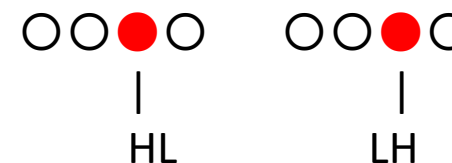
① Hが連結するTBUの直前and/or直後のTBUにLが連結する



~~② Lが連結するTBUの直前and/or直後のTBUにHが連結する~~



③ bitonal tone (HL, LH) がTBUに連結する



- 「アクセント核」と呼ばれてきたトーンはすべてプロミネンス(③)
- TBUは言語体系によって異なる(音節、モーラ、フット、「韻律語」)

※細かいところで問題が生じるので、皆様のご意見を伺いたい

3. ケーススタディー

鹿児島(N型-二型)

1σ	「ハ ¹ =ガ 1	ハ=「ガ 1
2σ	カ「ゼ ¹ =ガ 1	ヤマ=「ガ 1
3σ	サカ「ナ ¹ =ガ 1	オトコ=「ガ 1
4σ	ハタバ「コ ¹ =ガ 1	ハグルマ=「ガ 1

Uwano (2012)より

■ プロミネンス: 最小 1 最大 1

[+obligatoriness, +culminativity]

→ Stress language

小林(N型-一型)

1σ	ハ=「ガ」 1
2σ	ヤマ=「ガ」 1
3σ	オトコ=「ガ」 1
4σ	ハグルマ=「ガ」 1

■ プロミネンス: 最小 1 最大 1

[+obligatoriness, +culminativity]

→ Stress language

甌島-里 (N型-二型)

2μ	イ「シ」=ガ 1	「イ」又=「ガ」 2
3μ	「イ」ナ「カ」=ガ 2	「ア」タ「マ」=「ガ」 2
4μ	「ア」マ「ザ」「ケ」=ガ 2	「ア」サ「ガ」オ=「ガ」 2

窪菌他(編) (2016)より

■ プロミネンス: 最小 1 最大 2

[+obligatoriness, -culminativity]

東京(多型)

1μ	カ=「ガ 0	「テ ¹ =ガ 1			
2μ	カ「ゼ=ガ 0	「サ ¹ ル=ガ 1	ヤ「マ ¹ =ガ 1		
3μ	サ「カナ=ガ 0	「カ ¹ ブト=ガ 1	コ「コ ¹ ロ=ガ 1	オ「トコ ¹ =ガ 1	
4μ	ニ「ワトリ=ガ 0	「カ ¹ マキリ=ガ 1	ム「ラ ¹ サキ=ガ 1	ア「オゾ ¹ ラ=ガ 1	〇「〇〇〇 ¹ =ガ 1

Uwano (2012)を一部改訂

cf.

コ「ノ サカナ=ガ 0 コ「ノ カ¹ブト=ガ 1 コ「ノ ココ¹ロ=ガ 1 コ「ノ オ「トコ¹=ガ 1

※上昇はphrase-level toneであり、word-level prominence ではない

■ プロミネンス: 最小 0 最大 1

[-obligatoriness, +culminativity]

京都(多型)

1μ	「ト:=ガ 0	「ハ ¹ :=ガ 1		
2μ	「カゼ=ガ 0	「オ ¹ ト=ガ 1		
3μ	「クルマ=ガ 0	「ム ¹ スメ=ガ 1	「サ ¹ ギ ¹ シ=ガ 1	
4μ	「ニワトリ=ガ 0	「ア ¹ サガオ=ガ 1	「ア ¹ ミ ¹ モノ=ガ 1	「カネ ¹ モ ¹ チ=ガ 1
1μ	テ:=「ガ 1			
2μ	フネ=「ガ 1		サ「ル ¹ =ガ 1	
3μ	スズメ=「ガ 1		カ「ブ ¹ ト=ガ 1	
4μ	アトアシ=「ガ 1		キ「ノ ¹ ボリ=ガ 1	マツ「タ ¹ ケ=ガ 1

Uwano (2012)を一部改訂

■ プロミネンス: 最小 0 最大 1

[-obligatoriness, +culminativity]

※「無核」イコールプロミネンス無しではない

奈良田(多型)

1 μ	「カ ¹ =ガ	テ=「ガ		
2 μ	「カ ¹ ゼ=ガ	サ「ル ¹ =ガ	「ヤ ¹ マ=「ガ	
3 μ	「サ ¹ カナ=ガ	カ「ブ ¹ ト=ガ	「コ ¹ コ「ロ ¹ =ガ	「オ ¹ トコ=「ガ

1 μ	「コ ¹ ノ カ=ガ 0	「コ ¹ ノ テ=「ガ 1		
2 μ	「コ ¹ ノ カゼ=ガ 0	「コ ¹ ノ サ「ル ¹ =ガ 1	「コ ¹ ノ ヤマ=「ガ 1	
3 μ	「コ ¹ ノ サカナ=ガ 0	「コ ¹ ノ カ「ブ ¹ ト=ガ 1	「コ ¹ ノ ココ「ロ ¹ =ガ 1	「コ ¹ ノ オトコ=「ガ 1

Uwano (2012)・小西(2022)を一部改訂

■ プロミネンス: 最小 0 最大 1

[-obligatoriness, +culminativity]

※重起伏調イコールプロミネンス2つではない。

池間(N型-三型)

1PWd (ブ[↑]トウ[↑])=(カラ)=(マイ) 1
H L L

(マ[↑]ユ[↑])=(カラ)=(マ[↑]イ) 2
H L HL

(ナ[↑]ビ)=(カラ[↑])=(マイ) 1
H H L

2PWd (ミ[↑]ズ[↑])+(バナ)=(カラ)=(マ[↑]イ) 2
H L L HL

(ム[↑]ズ[↑])+(グル)=(カラ[↑])=(マイ) 2
H L H L

(ハ[↑]ズ[↑])+(ナ[↑]ラ[↑])=(カラ)=(マイ) 1
H H L L

3PWd (サ[↑]キ[↑])+(ヌン)+(アグ)+(カラ[↑])=(マイ) 2
H L L H L

(ン[↑]ー)+(ニー)+(ナ[↑]ビ[↑])+(カラ)=(マイ) 2
H L H L L

(ユイ)+(ファウ[↑])+(ブス)+(カラ)=(マ[↑]イ) 2
H H L L HL

■ プロミネンス: 最小 1 最大 2

[+obligatoriness, -culminativity]

弘前(多型)

1σ	カ=「ガ」 ¹	「テ」 ¹ =ガ ¹			
2σ	カゼ=「ガ」 ¹	「サル」 ¹ =ガ ¹	ヤ「マ」 ¹ =ガ ¹		
3σ	サカナ=「ガ」 ¹	「カブト」 ¹ =ガ ^{2?}	コ「コロ」 ¹ =ガ ^{2?}	オト「コ」 ¹ =ガ ¹	
4σ	ニワトリ=「ガ」 ¹	「コスモス」 ¹ =ガ ^{2?}	ム「ラサキ」 ¹ =ガ ^{2?}	カラ「カサ」 ¹ =ガ ^{2?}	〇〇〇「〇」 ¹ =ガ ¹

Uwano (2012)を一部改訂

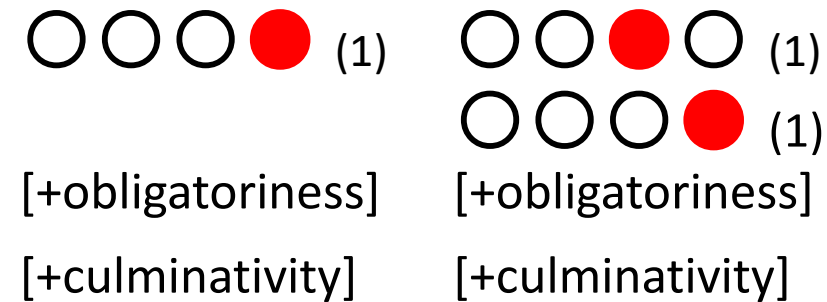
■ プロミネンス: 最小 1 最大 2?

[+obligatoriness, -culminativity?]

※プロミネンス2つイコール重起伏調ではない?

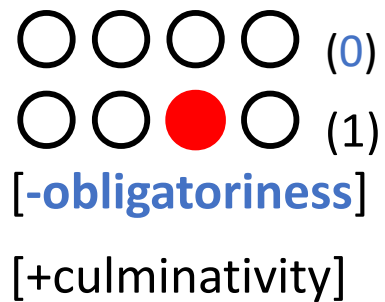
4. 結論

要約

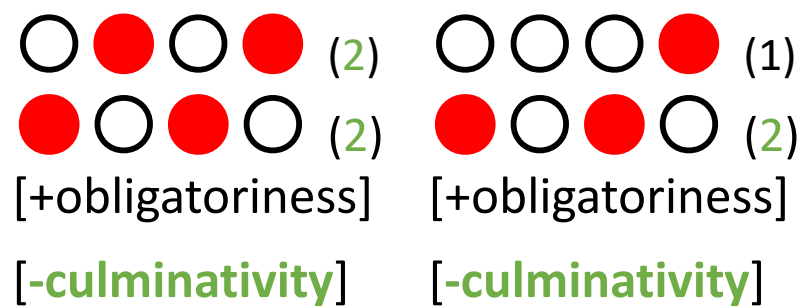


“stress languages”

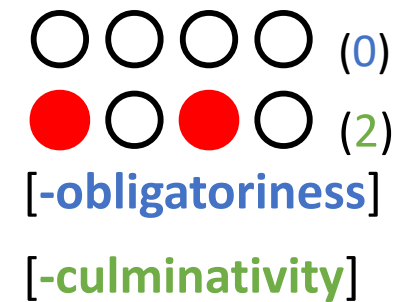
- 小林
- 鹿児島



- 東京
- 京都
- 奈良田！



- 甑島(里)
- 池間
- 弘前？



- ？

展望

- Obligatoriness, culminativityの観点から多様な日琉語変種を分類することによって、新たな知見が得られることが期待できる。
 - Kubozono (2012)
 - 「[-culminativity](プロミネンス2つ)の体系であれば、N型アクセント体系である」と一般化できる可能性があるが、
 - 多型アクセントでかつ[-culminativity]の体系もあり、一般化の例外となる。
 - 多型アクセントで[-culminativity](重起伏調を持つ体系)は、奈良田のように、2つのプロミネンスのうち一方はphrase-level toneである可能性が高い。[-culminativity]ではなく[+culminativity]。
 - 「[-culminativity]の体系であればN型アクセント体系」というKubozono (2012)の一般化はなお有望。
 - ただし、弘前のような、重起伏調を持たないが、[-culminativity]と分析可能な体系もあり、問題となる。
 - どのようにプロミネンスを定義するかによって結果が変わりうる。

引用文献

- Haraguchi, Shosuke (1979) *The Tone Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology*. Tokyo: Kaitakusha
- Hyman, Larry M. (2006) Word-prosodic typology. *Phonology* 23(2), 225-257.
- Kubozono, Haruo (2012) Varieties of pitch accent systems in Japanese, *Lingua* 122(13): 1395-1414.
- 窪園晴夫・上野善道・木部暢子・久保智之・松森晶子・新田哲夫(編)(2016)「甌島方言アクセントデータベース」<http://koshikijima.ninjal.ac.jp/>(2023年6月7日閲覧)
- Uwano, Zendo (1989) Nihongo no akusento. In: Sugito, Miyoko (ed.), *Kōza Nihongo to Nihongo Kyōiku 2: Nihongo no Onsei, On'in*, vol. 1, 178–205. Tokyo: Meiji Shoin.
- Uwano, Zendo (2012) Three types of accent kernels in Japanese, *Lingua* 122(13): 1415-1440.